

私は、1999年12月より2ヶ年の予定で英国での研究生生活の機会を与えられ、現在在英中の身です。日本からロンドンヒースロー空港に降り立ってから早いものでもう一年が経とうとしています。これまでの生活を振り返って楽しかったこと、辛かったこと、またためになったことや大失敗の経験など数限りなくありますが、その中からいくつかの経験談を交えて今回英国生活をご紹介します。

こちらに来てからまず感じたのは一日の日照時間の違いでした。私が渡英した12月は冬至に近いこともあり、日の出は8時頃、日の入りは3時過ぎという昼間の短さでした。まだ暗い時間に大学へ行き、帰る頃には真っ暗、というパターンだったのです。緯度が高く太陽の南中高度が低いこともさることながら、どんよりとした曇り空は決して晴れることなく、このままこの世の終わりを迎えてしまうのではないかと思えるほどでした。2月を過ぎたあたりから日の長さは急激に長くなり3月には晴天を望める日もでてきます。そして日本よりは1カ月は早く、桜も咲きますが、それに騙されてはいけません。4月になっても5月になっても、そして6月になり3時半の日の出、10時半の日の入りを迎える長い昼間を迎える頃になっても天気の変り変わりはさほど変化がないのです。一日の中に四季があるとはよく言ったもので、町中を歩いているとTシャツ一枚の人から、コー

トを羽織った人まで見かけますが、どうやらこれは出かける時間帯の違いを反映しているようなのです。天気の良い日は少ないのですが、大雨の日というのも殆どありません。従って噂に聞いていたとおり、こちらの人は傘をさしません。霧雨程度の日を何度も経験しましたが、傘をさしているのは大抵おばあさんか身なりのよいお嬢さん。一方、町中に多いのは犬を連れた路上生活者たちです。この国では高度な社会福祉を目指して、労働党の昔から高額な税金（所得税25%以上、消費税17.5%）を課しているため、申請のあった失業者には2週に90ポンドという高額な生活費が支給されます。ちなみに私達夫婦の1週間の食費は40ポンドほど。これでは、失業した若者がムキになって職探しをしなくても生活には困らないはずで、実際、日本とは比べものにならないくらい皆若く、中には女の人も見かけます。さらに驚いたことに、彼らが連れている動物にも国からは補助金が出されます。従って殆どの路上生活者は犬を連れています。一体あのワンちゃんたちはいくら貰っているのか、今度聞いてみなければならないと思っています。英国恐るべし、です。

さて、私の留学先である Leicester について話題を移します。ちなみに Leicester と書いて何と読むか分かりますか？ライセスターでもライチェスターでもありません。レスター、と読みます。レスターはイングランドの中央部に位置するレス



レスター市役所。この時期（1999年、12月）、見事なクリスマスのデコレーションが臨めた。



市内の至る所には大きな公園がある。イースターを過ぎる頃には木々の葉も青々と生い茂り、休日にはサッカーやクリケットに興じる人たちが賑わう。クリケットプレイヤーは皆白い洋服を身にまとうが、それは別にユニフォームではなく皆ばらばらの格好。

ターシャー州の州都で、ロンドンから北に100マイル(160キロメートル)ほどの場所に位置する人口28万人あまりの中規模都市です。西には英国第二の工業都市バーミンガム、北にはロビンフッド伝説で有名な観光都市ノッティンガム、南にはロンドン、ケンブリッジという主要都市に囲まれ英国内でも目立たない存在ですが、逆にここを拠点としてどこに出かけるにも交通の便には恵まれているとも言えます。実際レスターを拠点、中継点とするモーターウェイ(高速道路)がいくつも整備されており、各主要都市へのアクセスは非常に便利です。唯一レスターから東(北海)へ向かう道だけは国道のみですが、これも片道2車線以上の場所は制限速度がモーターウェイと同じ。しかも国道は中心街を抜ければあとはもう牧場の中の一本道。日本のように信号や大型商店の前で賑わう車の列に悩まされることは殆どありません。英国の道路事情には感動、です。

英国の大抵の町がそうであるように、レスターもまたよく言えば歴史と伝統を誇る、悪く言えば百年以上も何の発展もない町並みを残しています。町のそこかしこにはカトリック教会やムスクを見かけます。また英国の住宅はセミデタッチドハウスといって一軒が左右対称の2世帯からなる、というのが典型です。どの住宅にも煙突がありますが、実際には暖房がガスや電気にとって替わられた1970年代にはどの家も暖炉が使われることがなくなり、今ではその形のみをとどめています。公園が多い、というのが英国国民の自慢ですが、



レスターから南へ20キロメートルほどの場所にある運河のステーションFoxtonlocks。個人所有のboatが多く見られる。これらは英国内を縦横する運河を通して英国各地へ行くことができる。

ここレスターも例に違わず広くて心地よい公園がたくさんあります。綺麗に刈られた芝の手入れは市が管理し、休日ともなるとサッカーやクリケット、また天気の良い日には日光浴をする人たちが賑わいます。こちらでは日照時間が日本に比べて非常に短いため、太陽のでる日には気温に関係なく競って公園に出向き太陽を浴びる、といった様相です。英国国民恐るべし、です。

レスターはスポーツが盛んで、サッカープレミアリーグのレスターフットボールクラブはWorthingtonカップ(日本同様、英国プレミアリーグには様々なトーナメントがあるが、そのうちのひとつ。ナビスコ杯のようなもの…かどうかは分からない)で優勝を果たし、ラグビーのレスタータイガースはリーグ優勝を果たしました。また、クリケット、テニス、ゴルフやスヌーカー(ビリヤードの一種)なども人気がありテレビのゴールデンタイムには試合の中継もあります。一般的に英国ではミドルクラス以上の人たちとローア階級の人たちとでは好みのスポーツも異なると言われていますが、実際にラグビー、クリケット、テニスなどのスポーツは観客もプレーヤーもどこか上品で育ちの良さを感じます。そして休日に公園に出かけるとどこもかしこもサッカー少年、少女たちでいっぱい。テニスコートはあっても、そして無料であってもあいていることが多いのには驚きました。サッカーの観客のマナーの悪さはフーリガンGBHとして日本でも有名ですが、2000年に



大学前にあるコンサートホールDe Montfort Hall。花壇の花は毎月植えかえられる。

オランダとベルギーで行われたユーロ2000（ヨーロッパ選手権）でイギリス人のファン数百人が逮捕された時には、ブレア首相が会見を開かねばいけないほどのニュースになりました。英国のスポーツ侮れず、です。

そしてレスターの町に忘れてはならないのが De Montfort の名前です。De Montfort 爵がこの地方を制圧したノルマン人の末裔であり、レスターの議会制度を確立した人物であることだけでなく、通りの名や広場に彼の名をとどめていること、また市内に彼の像が4つもあること、そして何とんでも大学の向かいにある De Montfort Hall という大きなコンサートホールに彼の名をみることが出来ることからその影響力の大きさを想像することができます。1913年作られたそのホールではかつて Beatles を初めとして多くのミュージシャンのコンサートが行われ、今年になってからも John Meyall や Peter Green、またかつて Rolling Stones のベーシストであった Bill Wyman といった往年の大御所ミュージシャンのコンサートが行われました。日本では高額の値段を付けられる彼らのチケットもこちらでは20ポンドほど（3,000円程度）で手に入ることもあり、私も今を逃す手はないとばかりにコンサート通いを楽しんでいます。ブリティッシュロック最高、です。

次に私の通うレスター大学についてご紹介します。レスター大学は1921年創立の国立大学で医学、法学、工学、教育学部などの40を越える講座と1000人以上のフルタイムアカデミックスタッフ、7000人以上の学生を誇る世界に名だたる研究と教育の



英国を代表するセミデタッチドハウス。左右対称の2世帯住宅だが、別に知り合いが隣に住んでいるわけではない。

大学として有名です（とパンフレットには書いてあります）。大学内での知名度は遺伝子工学研究を行っている理学部が高く、近年男性用の避妊用ピルの生成に成功した、というニュースが英国国内でもトップニュースとして報道されたことがあります。1970年代に設立された医学部は5年制です。3年間の基礎教育の後に病院研修を含む2年間の専門教育が行われます。私が所属しているのは医学部の Pre-Clinical Sciences という講座で基礎の解剖学講座で、Biological Sciences 講座も兼ねています。大学教育の中での立場は3年生までの学生の医学の基礎教育全般を担当する立場にあたり、解剖実習、生理実習、またこれらの講義を担当しています。大学には日本で言う教養年度や教育が存在しませんので、入学した当初から医学専門の教育を行い、1年でも落第をした者や中ランク以下の成績を取った者は自分の希望するコースに進むことが出来ません（耳が痛い）。私がいる Dr. Donga の実験室は50坪はあろうかという広いスペースを誇ります。しかし、ほとんどの研究室がグラウンドフロアにある中で（日本の1階は、こちらではグラウンドフロア、日本の2階がこちらの1階に相当します）、私たちのいる部屋が地階、そして解剖実習室のすぐ横ということもあってか、多少他のメンバーと隔絶されているというイメージがあります。このため、こちらに来てからしばらくの間は講座の人たちとも交流がなく淋しい思いをしました。

こちらでの研究を少しご紹介します。現在、Dr. Donga とともに咀嚼運動に関する運動核周囲核の活動パターンの検索に関する研究を行っていま



レスター大学医学部Pre-Clinical Sciences、Biological SciencesのあるMarice Shock Building。

す。咀嚼のリズミカルなパターンの形成の誘発に関しては、巨大細胞網様核や傍巨大細胞網様核を含む橋尾側部・延髄網様体にパターンジェネレーターと呼ばれるインターニューロン群が存在し、その役割を果たすことが知られています。さらに近年、スウェーデンウメア大学の Westberg らのグループが橋吻側部の三叉神経脊髄路核吻側亜核 γ やその周辺核にも皮質から短潜時で応答し、リズミカルな活動を示すニューロン群が存在するが示され、これらが咀嚼のリズム形成に大きく関与することが示されました。他にも咀嚼のリズム形成に関わる部位が吻側部に存在することは Dr. Donga らの以前の研究で示唆されており、その一部である三叉神経上核の活動特性についての検索を行っています。動物を用いた実験は時に昼夜に及ぶことも多く、明け方になってから大学の人間に「おやすみ」の一言をもらって帰宅することも少なくありません。

ところで、英国で動物を用いた動物実験を行うには国から与えられるライセンス（英国内務省管理の personal license）が必要です。そしてこのライセンスを得るためには3日間にわたるトレーニングコースと2日間にわたるペーパーテスト、実習テストをクリアしなければいけません。私がこのコースを受けたのは渡英後間もない1月のことでした。事前にテキスト等を知り合いの先生から貸していただき、受験勉強しながらに暗記をしましたが、肝心の当日の講師の講義内容は半分も分



Mathew street in Liverpool. When the night has come, 酔っぱらいに絡まれる。

かりませんでした。ただし講習の参加者が10人足らずと少なく、講義前後で講師の先生とのコミュニケーションをとっていたことや、実習試験で(ラット腎摘出術でしたが基本的なメスの扱いや縫合などは歯科医師としての経験がものをいったせい)悪いイメージを与えずにいたことが功を奏したのか、何とか合格できました。ただし、2週間後の合格の報を聞いてから実際にライセンスが発行されるまでには2ヶ月以上もかかり、その間は一切実験には関わることが許されないという日々が続いたのには参りました。今後英国への留学を考えておられる皆様には是非ともライセンス取得のための事前の十分な試験勉強をお勧めします。よろしければテキストも貸し出しますので。

この他にも紹介しきれない英国の生活事情、大生活の様子などありますが、まだまだ折り返し点に来たばかり。帰国の際には研究成果を含めてさらに充実した英国生活の報告ができることを期待して稿を終わりたいと思います。また、ごく一部ですがこちらの生活を以下のURLにアップしましたのでご紹介させていただきます。

<http://pws.prserv.net/jpinet.inou182/index.html>

今回の留学に関しては、出国直前まで周囲の方々にご心配をおかけしました。自身の不摂生による発病により半年間の入院生活を余儀なくされ、その上退院直後の渡英ということもあり山田好秋教授をはじめとする口腔生理学講座の皆様、大学の事務の皆様他多くの方々にご多大なるご援助を賜りましたことに心よりお礼申し上げます。



まさかの体験。生まれて初めてロッククライミングをしたGlyderau in north Wales。白く小さいヘルメット(私)はやがて霞の向こうに消えていった。